

里親家庭の家族らが自身の体験や思いを基にした絵本を出版する動きが広がっている。里親制度への理解を広げたいとの思いがある。

(丸山菜々子)

「お父さんとお母さんが出会って私と出会って、妹と出会って、だんだん家族になっていく。私たちは出会って家族です」。4月25日、千葉県柏市のイベントで小学4年生の古田島心愛さん(9)と2年生の真凜さん(7)がマイクを前に、絵本を読んだ。絵本の題名は「であってかぞく」。心愛さんが保育園の時に書いた手作り絵本が原作だ。

2人は生まれてまもなく、里親制度によって、あかねさん(37)と知則さん(39)の夫婦に迎えられた。心愛さんが絵本を書き始めたのは、保育園に通っていた5歳の頃。同級生に「里親って何」と言われたのがきっかけ。「悲しかった。たくさんの人に里親について知ってほしいと思った」と、自身の日常生活や思いから着想した物語をつくらせて6歳の絵本に「こぞく」をして、同級生らに配った。

心愛さんが卒園後も絵本を書き直すなどしていたことが

里親家族 絵本にしたよ

出版相次ぐ 制度「理解を深めて」

鎌倉さんが企画した絵本「ぼくのかぞく」

「ぼくのかぞく」



里親って なあに？



る場面を複数差し込むなどしているのが特徴だ。「子どもから大人まで、里親の存在について考えてもらうツールを作ったかった」と話す。

現在は販売していないが、同県内の図書館で閲覧できるほか、里親制度に関するパネル展などで紹介している。鎌倉さんは「絵本などを通じて正しい理解が広がっていくことで、子どもたちが地域でしっかりと育っていく社会につながる」と話している。

ら、あかねさんは昨年、知人に紹介してもらったイラストレーターに相談して出版することにした。登場人物を白クマやパンダに描き換えてもらった絵に心愛さんや真凜さんが色を付けて、インターネット販売を始めた。

現在は特別養子縁組を結び戸籍上の親子になっている。心愛さんは「里親のもとで暮らす子にも読んでほしい。仲間がいる。一人じゃないよ」と話す。

日本財団子ども事業本部長の高橋恵里子さん(55)は「制度に触れる機会が少ないこともあり、社会的な理解がなかなか深まらない」と指摘。「絵本は誰もが手に取りやすく、記述がわかりやすいため、制度理解のきっかけに役立つ」と話す。

「特別じゃない」

佐賀県鳥栖市の短大講師で、養育里親として高校1年、中学2年、小学6年の3人の子どもを育てている菅原亜紀さん(50)は22年、絵本「ぼくのかぞく」を自費出版した。

「知人も行政も里親家庭への理解が足りない」と危機感を持ったためだ。

絵本は、里親に預けられた男の子が、生みの母親とも交流を続けながら成長していくストーリー。ママがママの所に遊びにきたり、ママとママとほくで出掛けたり。自身の経験に基づき、「特別でもない、一つの家族の話を書いた」という。

東京都が2019年度に実施した「里親制度に関する都民の意識調査」によると、回答した20～69歳の男女1360人のうち、里親制度について、「言葉も内容も知っていた」「人は約2割。約7割が「言葉は聞いたことはあったが、制度の内容は詳しく知らない」とした。

長野県松本市の松本赤十字乳児院・里親支援センターひまわりセンター長、鎌倉美枝さん(59)も20年、養育里親の絵本「里親って なあに？」を企画した。里親の意見を聞きながら制作。「いまだになきもちでいるのかしら？」など、子どもの心情を考えさせ

でもいろいろな事情で暮らす子どもを、実定期間迎え入れて養育する「養育里親」など、4類型がある。

里親制度 様々な事情で暮らす子どもを、実定期間迎え入れて養育する「養育里親」など、4類型がある。

イベントで絵本を読む心愛さん(右)と、真凜さん(千葉県柏市で)

